



自分は自分と思えるために～ドイツのとある哲学者が教えてくれたこと～

副校長 沖山 宗弘

9月7日(月)に予定されていた全校朝会では、校長先生に替わり全校児童の前でお話する予定でした。しかし、警報級の大雨の予報により休校となったため、直接伝えることができなくなってしまいました。そこでこの紙面をお借りして、朝会でお話したかった内容を少し改変してお伝えします。

始業式で校長先生が夏休みの体験を楽しそうに話されていたので、私もこの夏休みに観た映画のことを伝えたいと思いました。映画館の大きなスクリーンで鑑賞すると、テレビでは味わえない迫力や、その世界に引き込まれて自分が当事者になったかのような臨場感を味わえるのが大きな魅力です。この夏は三つの作品を観ました。

まずは『ちいかわ 人魚の島のひみつ』。この夏一番の話題作となったのではないかと思います。「何が正しいんだろう?」と考えさせられる場面が多くありました。

次に『キングダム 魂の決戦』。歴史好きで教員になった私にとっては見逃せない作品で、圧倒的なスケールとともに命の尊さについて深く考えさせられました。漫画やアニメでもお馴染みの作品です。

そして最後に『あの星が降る丘で、君とまた会いたい。』です。戦争によって夢や幸せを諦めざるを得なかった時代背景や人との関わり方が描かれており、心を揺さぶられました。

実はこの3つ目の映画の中で、ある有名な哲学者の言葉が使われていたことが、朝会で取り上げようと思った一番の理由です。それが、ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの「世界には、君以外に誰も歩むことのできない唯一の道がある。その道はどこに行き着くのか、と問うてはならない。ひたすら進め。」という言葉です。自分が「こうだ」と決めたことは責任をもってやり切るしかない。「どうせダメだ」と勝手に結果を決めつけず、自分を信じて突き進もうという意味です。そして、誰しもがもつ「夢」に向かって努力することを、周りの人は決して笑ってはいけないという思いも込められています。

この映画をきっかけにニーチェについて調べてみると、「人は人、自分は自分。『みんなが言っているから正しい』とすぐに決めつけず、自分の頭で考えることが大切だ。そして『どんな自分になりたいか』を問いかけ、自分の人生を生きよう」という教えを大切にしていた人物だと分かってきました。他にも、心に残った言葉をご紹介します。

「自分を愛することを学べば、他者への憎しみは消え去る。」

自分のことが好きですか? 自分の良いところを言えますか? まず自分を好きにならなければ、他人の悪口ばかりになってしまい成長は期待できません。自分に自信をもてるようになれば、周りの行動や評価に振り回されることなく、他者を尊重できるようになります。

「生とは、苦しみを抱えながら力強く肯定することだ。」

生活していれば楽しいことばかりでなく、辛いこともあります。学校や習い事でも、努力が必要な場面がたくさんあります。しかし、簡単にできることばかりではやりがいも達成感も得られません。困難を乗り越えた先にこそ、「やってよかった」という本当の喜びが芽生えます。

「大切なのは、考えることではなく、生きることである。」

あれこれ悩んで何もしないのではなく、まずはやってみる、挑戦してみることが大切です。失敗から学ぶこともたくさんあります。子供たちには失敗を恐れずに挑戦してほしいですし、私たち教職員も常に挑戦し続ける集団でありたいと強く感じました。

映画を観ることをきっかけに、気持ちよく生きるためのヒントをたくさんもらった夏休みとなりました。

自分の生き方を豊かにするものは、映画や音楽などの芸術に触れること以外にもあります。この映画には原作となる小説が存在しますが、主人公の年代設定やストーリー展開が映画とは異なっており、その違いを味えたという意味で読書の面白さも感じる事ができました。本との出会いもとても大切だと改めて実感しました。

秋は気候も涼しくなり、じっくり本を読むには素晴らしい季節です。学校では図書委員会の児童や保護者ボランティア「マザーグース」の皆様、そして教職員も一体となって様々な読書への取り組みを用意しています。読書を習慣付け、知的にも心理的にも実りのあるものとなるよう支援してまいります。

